

「ようこそ！大学へ ～多様な学生確保に向けての社会との情報共有について～」

グループ名:だんご 8 兄弟(D 班 1 グループ)

1. 大学職員情報化研究講習会について

本講習会は、社団法人 私立大学情報教育協会の主催により、平成 21 年 7 月 6 日(月)から 8 日(水)にかけて、静岡県浜松市の浜名湖口イザルホテルにて開催された。参加者は 234 名である。情報を活用することの重要性を理解し、職員の共通能力としての情報活用能力を高めることを目的としている。

大学職員として必要な視点についての講義の後、8 人前後のグループに分かれて、大学を取り巻く問題とその解決方法について討議を行った。討議内容は、プレゼンテーション形式で発表し、相互評価を行った。

2. テーマ選定の経緯

討議では、メンバーそれぞれが異なる立場や視点を持っていることもあり、大学が抱える諸問題について広範な議論が交わされ、相互に認識を新たにすることができた。

論点整理の過程では、学生を軸とした「入口～中～出口・大学全体」という視点が呈示され、その中から「入口」にあたる「学生募集」について、大学が抱える問題点と改善のための課題を話し合った。

各大学は様々な広報活動を行っているが、その手法も無数にある訳ではなく、ある程度似通ったものとなってしまうところがある。また情報の量は多いが、大学間また同一大学内でも形式が標準化されている訳ではないため、統一した手法でアクセスすることは難しい。その結果、受験生が多面的な視点から大学を選ぶためには手間を要し、結局は偏差値のような一面的な指標に頼ってしまうのではないだろうか。

以上のような問題意識のもと、我々の意見は「受験生の本来あるべき姿である『自ら情報を取捨選択する』行動が難しくなっていることが、大学、また受験生自身にとっても問題なのではないか？」という点に集約された。

3. 「ようこそ！大学へ ～多様な学生確保に向けての社会との情報共有について～」

上記の議論を経て、我々のグループでは、「ようこそ！大学へ ～多様な学生確保に向けての社会との情報共有について～」というテーマを設定した。

18 歳人口が減少し、生涯教育という概念が浸透している中、受験生は高校生だけとは限らない。このテーマのもと、多種多様な背景を持った受験生たちの興味を引くために偏差値以外のどのような情報が必要なのか、また、これらの情報をどのような方法で集約し、どのような形で社会に提供できるのか等が話し合われ、様々な意見が挙げられた。

そして最終的に我々のグループでは、下記の Web システムを提案するに至った。

4. 解決案「大学横断比較システムの構築」

上記の問題を解決するために、多面的な視点から複数の大学を横断的に比較できる Web システムの構築を提案する。

大学を比較するための情報として、偏差値だけではなく、教育理念，学風，カリキュラムの内容，教員もしくは教育スタッフ，就職状況，教育・研究設備といった情報から、もっと身近なサークル活動状況，学食のメニューなどの福利厚生まで、あらゆる情報を蓄積する。

これらの蓄積した情報を組み合わせて検索することで、多面的な視点を提供できる。これは受験生が主体的に大学を選択する際の一助となるだろう。

さらに、このシステムは受験生以外にとっても有用な情報を提供することができる。例えば、その大学で履修できる授業の情報や卒業生の就職先等の情報を項目として設けた場合、在学生在が履修プランや就職活動プランを立てる際に役に立つ。また、企業が求める人材のマッチングの際にも活用できる。そして、大学にとっても、自大学の特色を知ることができ、集中投資すべき分野を把握するのに役立つ。

5. 添付資料

グループ討議録 6 ページ

発表スライド（7月13日修正） 7 ページ

以 上

平成 21 年度 大学職員情報化研究講習会
～基礎講習コース～
グループ討議

日 時：平成 21 年 7 月 7 日（火） 9 時 00 分～18 時 00 分
場 所：浜名湖口イヤルホテル
チーム名：だんご 8 兄弟（D 班 1 グループ）

第 1 ステージ（自己紹介、テーマ設定）

【大学が抱える問題】

大学が抱える諸問題を入口（広報、入試）、中（学生生活）、出口（就職、キャリア支援）、大学全体の 4 項目に分け、意見を出し合いテーマ設定を行った。

入口

- 募集力、アピール力が弱い。
- どういう学生を集めたいのか、社会が求める人材等が明確化されていない。
- 建学の精神を教職員がきちんと理解していない。
教える立場である教職員は理解しておくべきである。
建学の精神そのままでなく、解釈しやすいよう噛み砕いたものを共有する。
学生には理解するよう強制すべきではない。

中

- 退学者、学部のミスマッチ者へのフォローや支援が十分でない。
教職員がドロップアウトしそうな学生に対して相談に乗り、未然に防ぐ。
フォロー制度はあるが機能させるのが難しい。
- 学習意欲の低下により出席率が低下し、留年してしまう学生へのフォローが十分でない。
- 情報活用が十分にできていない。
学生の出席情報を教職員で共有し、出席率が低下している学生を早期発見する。

出口

- キャリア支援が十分にできていない。
他部署と情報共有し、学生をフォローしていく。
- 行き詰っている学生には色々な道があることを示す。
- 医科大・・・国家試験合格が目標 とにかく出席・勉強させる。
目標が国家試験のみになってしまう。
知識の詰め込みになってしまうのではないか。

大学全体

- 大学全体で統一した支援・サービスは、キャンパスが離れていると差が生じてしまう。
例：ICカードによる出欠確認
事務の効率化につながるが、途中退出する学生もいる。
- 多岐にわたる分野や専門性は大学の強みであるが、入学後、ミスマッチによる自主退学者が出る。

大学が持っている情報を見せる。

目 標 多様な学生をどう集めるか。

テーマ ようこそ！大学

～多様な学生確保に向けての社会との情報共有について～

第2ステージ（問題の分析と解決に向けてのディスカッション）

第1ステージで設定したテーマについて、問題点と課題の洗い出しを行った。また、同様な事例について各校の取り組みや解決事例を出し合った。

【問題点】

- 優秀な学生はレベルの高い大学に取られてしまう。
大学そのものに魅力が無い。
オープンキャンパス、イベントに人が集まらない。
- 広報活動が上手くいかない。
他大学と似通ってしまう。やりつくされた感がある。
- 広報活動を積極的に行っていない。
- 広報活動の評価・効果がわからない。
PDCAサイクルのやりようがない。
効果が数値として出る広報活動を行わなければならない。
↳ 受験者数・入学者数の増加
- 「これだけやれば、これだけ効果が返ってくる」というのが見えればいいのに…。

【各校の取り組み・解決事例】

- 公開講座を実施している。
- 学生が地域コミュニティに「講師」として参加している。
- 広報活動において、HP上だけでなく「YouTube」を利用している。
- 入学者へのアンケートを実施しているが、反映されているかはわからない。
情報共有、情報活用の不徹底
- 高校生を対象としたアンケート調査を実施する。
対象に応じて与える情報を限定する。
不要な情報を与えることで、相手の興味が下がるのを防ぐ。
例：推薦希望の学生には、推薦入試の情報のみ与える。
- イベント参加者の属性分析を行う。
母数が多くなるほど難しい。分析を行うエネルギーが無い。
- オープンキャンパス参加者がどれだけ入学したかがわからない。
住所等個人情報を記入したくない。
- 願書にアンケートを同封する。
- 外部委託も必要…大学職員は営業が下手。
異動サイクルは3～5年 スペシャリストが育ちにくい？
- 入試課が持っている情報を、人事課や広報課と共有する。
- 情報を受け取る側（受験生）が持つ「印象」を意識する。
- 大学の強みをアピールする（就職に強い、国際交流が盛んである等）。

実績など裏づけが無いと効果は薄い。

- 高校生が大学を選ぶ基準…ネームバリュー、偏差値
やりたいことがはっきりしていない。
- やりたいことが決まっている学生は自ら情報を得ようとする。
本来あるべき姿 = 多様・優秀な人材

問題点と課題の洗い出しを行った後、大学そのものに興味を持ってもらいたい、偏差値以外に多面的な観点で大学をアピールしたいという意見があった。そのためには大学横断型のシステム作りが必要であるとの結論に達した。

第3ステージでは具体的なシステム内容について議論することになった。

第3ステージ（発表に向けての内容の絞込みと議論の掘り下げ）

第2ステージで話し合った大学横断型のシステムについて、具体的なシステム内容、期待される効果、課題及び問題点について議論を行った。

【システム内容】

- 大学間の多面的な比較ができる。
- 主な内容…就職率、男女比、部活動、学食のおいしさ、学費、奨学金
- 学生生活における情報だけでなく、就職情報も掲載する。
授業の履修状況、就職活動状況や就職後の年収など…

【期待される効果】

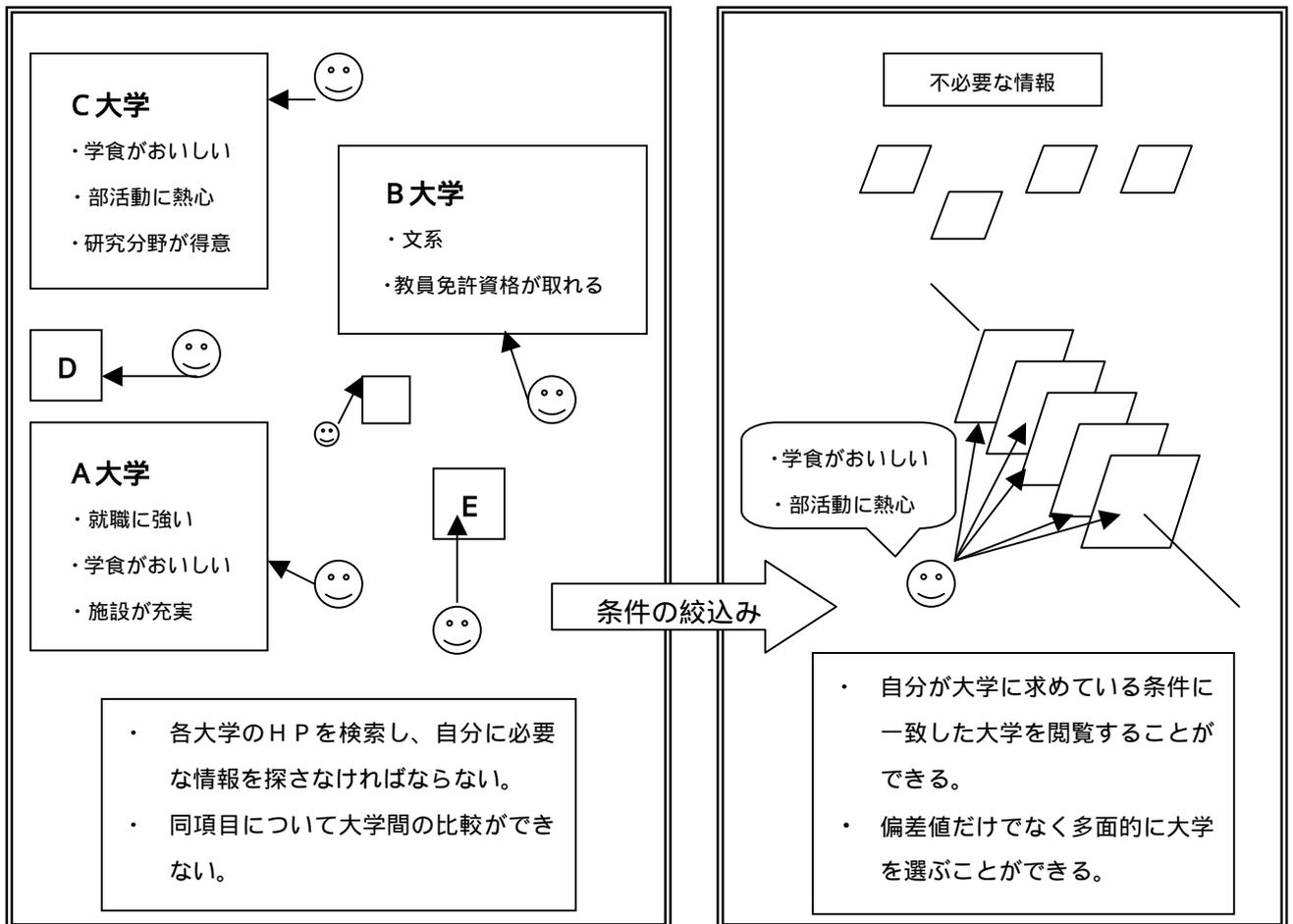
- 広報活動など、大学が学生確保のために行っている事業の効果について、可視化を実現する。
- 大学の自己評価、外部評価ができる。
- 自大学の「強み」「弱み」を把握しやすくする。
- グローバル化・多様化…情報が氾濫している。
選択肢を絞り込んで自分に有用な情報を閲覧することができる。
モデル化された学生像という、具体的なライフプランを選択肢として提示できる。
- 大学のイメージを掴むことができる。
入学後のミスマッチ、ドロップアウトを減らすことができる。
- 情報公開することで、家族に安心感を与えることができる。
- 企業が求める人材を探ることができる。
- 大学受験時の進路相談がしやすくなる。(高校教員)
- 偏差値による大学選びが減少する。
- FD活動にもつながっていくのではないのか。

【システム上の問題点・課題】

- 外部委託でシステム作りを行う。(Google等)
- 有名大学や偏差値の高い大学に有利なのではないのか。
有名大学が入っていないと情報の網羅性、信憑性に欠ける。
小規模校でも特色を出すことができる。
有名大学を利用するという手もある。
- メリット・デメリットをどうみせるのか。
- ユーザーの限定をどのように設定するか。

- データ集めや分析はどうやって行うのか。
- どのように評価するのか。
SP方式を利用する。
- センシティブな情報をどこまで扱えるか。
- アンケートには実施理由を明記する。

【システムイメージ】



第4ステージ（まとめ、成果発表、アクションプラン）

第2日目のディスカッションを踏まえて発表内容をまとめた。各グループ10分間の発表を行った後、相互評価を行った。

【他グループからの評価】

良い点

- 大学から企業にプランを訴えるという点が共感できた。
- 企画を実現するために他大学に呼びかけしている所が良かった。
- 理想的な提案であるが、実現できそうである。
- 発表が全体的にすっきりしていた。

改善点・課題

- 情報を見る側からみれば、マンモス校に注目が集まってしまうのではないか。

【自己評価・感想】

- (1) 今回の討論では、みなさん発言がしっかりしていて、多々驚く場面がありました。今回の討論はとても勉強になり、いい刺激になりました。今後、大学職員として働いていく上で、今回の研修で学んだことを生かせるように日々努力していきたいと思います。
- (2) 議論の中では、自分自身が考えもしない方向に論議が進む場面も多く、その都度自身の経験やスキル、考え方を発展的に活かせるよう考える経験ができた。
且つそれが、大学職員という大きな共通項の中で、逆に他大学どうしという異なる点も交えながら展開されたことで、単なる机上論としてではなく、極めて直接的、実践的な問題として捉えることができた。
大変貴重な経験であり、大学職員という仕事に改めて自覚を促すものであった。
- (3) グループ討議の注意点として、人の意見を否定しないというものがあつた。初日の講義では、相手は変えられないが自分が変われば心理的に相手は変わるとのお話があり、おかしいと思ったことも受け入れるよう努力した。結果、発表は高い評価を得た。自分が変わることの効果を実感できる経験だった。
問題の洗い出しや議論を行う場面は、現実にはあまりない。地域も年齢も異なる方々との議論は、普段接しない考え方に触れ、非常に刺激的だった。今後、業務で問題解決を迫られたときに、本研修で得た経験が解決の方策を示してくれると思われる。
- (4) 私たちのグループでは、偏差値による大学選びが主流である中、多様な学生をいかに確保するかという問題について討議を行った。最終的に、インターネットを利用して多角的視点から大学をみた情報を「串刺し」にした形で社会に提供するという、自分だけでは思いつけない興味深い解決策を導くことができた。メンバーの問題に取り組む姿勢や意見は刺激になり、自分を省みることができた。今回の研修では、情報に関する知識だけでなく、討議やプレゼンテーションを行ううえでの基礎力を養うことができたと思う。
- (5) 本研修では、内容はさることながら、他大学の参加者とグループ討議をすることで様々な発見や新たな視点を得ることができ、また各大学が抱えている問題を共有し、意思疎通できた点で大変中身の有る研修であった。
一方、現在大学職員には事務処理能力以外に、営業力や新しい価値を創出できる人材やPDCAサイクルを回せる人材といったあらゆることが求められ、あらゆる問題に対処する必要がある。
当然、大学自前ではできないことも多く、他大学とのネットワークを通じて問題解決をする点で様々な方と知り合うことができた本研修はあらゆる点で勉強になった。
- (6) 今回の研修では、情報共有の重要性を再確認することができた。グループ討議でも、社会との情報共有によって、大学側も学生（受験生）側もよりよい関係となれるような方法を話し合った。このグループ討議を通し、各大学の現状や抱えている問題を共有できたことや、意見を交換できたことは自分にとってとても貴重な経験となった。一つの大学だけでなく、大学同士が連携・協力し合うことによって可能性が広がるという視点は、今後大学職員とし

て働いていくなかでも大切にしていきたい。

(7) グループ討議を通してPDCAサイクルを実践することで、PDCAサイクルおよび講義内容をより深く理解することができた。また、自分と異なった考えを持った他大学の職員の方と意見交換、情報共有することで、新たな知識を得るだけでなく、自身の考え方を広げることができた。「情報を集め、活用する」ことは、あらゆる課題解決に用いることができるので、今回だけでなく普段の業務から意識していきたい。PDCAだけでなく、何事にも意識すること、また継続することが何よりも大事であり、職員の質の向上に繋がっていくのだと感じた。

(8) 今回の研修では、情報についての認識を大きく改めさせられた。特にグループ討議では、他大学の方の意識の高さに驚かされた。私たちのグループではどう大学をアピールするかという点について情報の観点から考えたが、交わされる全ての意見が非常に興味を引かれるものばかりだった。

また、得られたものは情報についての知識だけではなく、各大学の現状や問題点、その改善法など様々な内容に及んだ。今回学んだことを報告書のみには留まらず、日々の業務の中で是非実践していきたい。

以 上